

第 2 2 回原子力委員会定例会議議事録（案）

- 1 . 日 時 2 0 0 3 年 7 月 1 5 日（火）1 0 : 3 0 ~ 1 1 : 5 0
- 2 . 場 所 中央合同庁舎第 4 号館地下 1 階 共用 B 1 0 5 会議室
- 3 . 出席者 藤家委員長、遠藤委員長代理、木元委員、竹内委員、森嶋委員
 内閣府 榊原参事官 (原子力担当) 後藤企画官
- 4 . 議 題
 (1) 核燃料サイクルのあり方を考える検討会等で伺ったご意見について
 (2) 遠藤委員長代理の海外出張について
 (3) その他
- 5 . 配布資料
資料 1 - 1 核燃料サイクルのあり方を考える検討会-ご意見を伺った方々の声-
資料 1 - 2 Nuclear Energy & the United States of America
資料 2 遠藤原子力委員長代理の海外出張について
資料 3 第 2 1 回原子力委員会定例会議議事録（案）
- 6 . 審議事項
 (1) 核燃料サイクルのあり方を考える検討会等で伺ったご意見について

標記の件について、後藤企画官より資料 1 - 1 及び資料 1 - 2 に基づき説明があり、以下のとおり意見交換があった。

（木元委員）「核燃料サイクルのあり方を考える検討会」で伺ったご意見について、それぞれの委員によって受け止め方の深さが違うところもあると思う。そのようなご意見を全体像の中にどのように一つにまとめていくかがこれからの課題だと思う。今後は定例会議の場で議論したり、あるいは、各委員が個人の見解を出し、まとめていく方向になると思う。資料 1 - 1 の伺ったご意見のまとめについては、これで良いと思うが、これからまとめる全体像については、受け止めた感触で意見を申し上げたい。

(遠藤委員長代理) 資料 1 - 1 に記載されているご意見を踏まえつつ、全体像をより易しく取りまとめ、その全体像を持って、再度、対外的に説明する必要があると思う。そのときには、各委員の意見を念頭におきながら、説明していくことが必要だと思う。

(竹内委員) いろいろな切り口の意見があったのは事実だが、よくまとまっていると思う。核燃料サイクルの意義は、将来のセキュリティとコストであると思う。セキュリティについては、20年～30年先の日本を考えると、食糧とエネルギーは国民的な課題であり、国が担保しなければならないことは明らかである。国が担保するとなるとコストの議論が絡んでくる。コストの議論は現時点で考慮できる要素からしか試算できず、将来の不確実な要素に対するコストが含まれていない。この点が国民の皆様になんて納得されにくいところであると思う。例えば、オイルショックのとき、石油の値段が一遍に4～5倍になった。一方、この観点から見ると、ウランやプルトニウムは、将来の不確実な要素によりコスト高になることが少なく、特にプルトニウムの利用が始まると優位になる。将来の不確実な要素に対するコストを試算するのは難しいが、説明はしなければならない。

(森嶋委員) 「広聴」ということで、いろいろな方のご意見を伺った。原子力委員会がこれからやるべきことは、全体像をまとめていく過程で、原子力委員会の考えとは異なる意見に対し、我々から見ると当然なことで、おかしいではないかと思うことでも、きちんと取り上げ、それに対する答え、あるいは、こちらの論理を示していくことをしなければならない。そうしなければ、結局、何のために「核燃料サイクルのあり方を考える検討会」を開催したのか分からなくなってしまう。コストの問題も同じである。きちんと考え方について示すと同時に、竹内委員から話があったこともきちんと説明しなければならない。

(藤家委員長) 森嶋委員からあった話は重要だと思う。全体像をまとめる方法としていくつかあると思うが、伺ったご意見に対してQ & Aの形で答えるやり方が、読む側からすると一番分かりやすい方法かと思う。

ここからは、資料 1 - 1 の「1 . 核燃料サイクルのあり方」について議論したい。

(竹内委員) プルトニウム利用による核燃料サイクルまでいかないと原子力を利用する意味がなくなると思う。全体像ではその点をはっきりと示すべ

きだと思う。

(藤家委員長) 核燃料サイクルを説明する上で難しいのは、普通、ものを燃やせばなくなると思われているが、原子炉の中では、燃料を燃やすと新しく燃料がでてくる。このことは、一般の方にはなかなか分かってもらえない。原子力委員会は、このようなことをいかに説明できるかが重要だと思う。

(竹内委員) 工学的にも難しい話であり、一般の方には特に分かりやすく説明するかが重要である。

(遠藤委員長代理) 原子力は、高速増殖炉までいかない限り、持てる力はすべて発揮できないと思う。高速増殖炉にすぐにいけるわけではないので、その前段階としてプルサーマルを実施するのは良いが、最終的には高速増殖炉に持っていくということがない限り、核燃料サイクルは実現しないと思っている。

(藤家委員長) 原子力委員会は、昭和 31 年から核燃料サイクルの実現を目指してきており、その政策に責任を持ってきたし、その基本的なものの見方に対してご理解いただくことが多かったが、今は、現実問題の中で果たしてそれをどう理解したらよいのか戸惑っている方も多い。

(木元委員) 高速増殖炉サイクルの確立という考え方を持っていても、その考え方に至った経緯をトレースし、そのプロセスをきちんと明確にしていけないと説明にならないと思う。分かりやすく、難しい技術や仕組みの説明だけ行って、こういうことだから良いのだと簡単に説明することの危険性を感じている。そのような説明をするのではなく、「核燃料サイクルのあり方を考える検討会」においていろいろな問題が出されたことに対し、原子力委員会が、今の時点で、こういう方法が一番良いだろうという結論を正直に話し、なぜそのような結論になったかというステップ・バイ・ステップがあってほしい。全体像を示した上で、「原子力委員会は、今の段階でこのような全体像を示すことができた。また、いろいろなご意見もあるだろう。それならば、これに対するご意見をまたいただきたい」というように、これで完結ではなくて、次にまた皆様と話す機会があるという「つながり」の展開が欲しい。

(藤家委員長) 全体像を作り、原子力委員が手分けして、地方なり、中央でお話をすると同時に、当然ご意見を承る。今の日本社会において全員一致

でものが決まるということとはあり得ない。それと同時に、将来どうするかという専門性の議論も無視できない。それは、専門部会などで議論し、次期原子力長期計画に反映する。「核燃料サイクルのあり方を考える検討会」において伺ったご意見の中で、原子力委員会が政策を明確にすべきだとのご意見があったが、これは原子力長期計画の中に明確に記載すべきだというご意見だと思う。森島委員から話があったように、こういうものは、すべてが100%決まって動くものではなく、木元委員から話があったように二段階で次のステップに展開できるのではないかと思う。

(木元委員) 全体像は、原子力長期計画のために行っているのではなく、今の段階で、原子力委員会がどう考えているかということ示すものであると思う。原子力長期計画は全体像を踏まえた上で展開していくのであろうが、原子力長期計画のためと言わない方が良いと思う。

(藤家委員長) 二段構えとは、一つは木元委員から話があったことであり、もう一つは、ご意見を承ったことについて、原子力委員会の委員だけが聞くだけでなく、それをベースにし、今まで実施してきたように将来展望をどうするかという政策の策定について、より多くの方の参加を得て、作っていくことが重要であると思う。

(木元委員) 作業としては、専門部会などをお願いして実施する部分と、もっとベーシックなことで国民に話すことと分けておく必要がある。全体像は国民に向かっての発言だと認識している。

(藤家委員長) そのときにいろいろご意見を承るので、それをどう次の段階に反映させていくかという議論が必要だと思う。

(森島委員) これまでの原子力に関わる我が国中央政府の政策は、いろいろと検討した結果かもしれないが、これしかないという形で実施されてきたとされ、原子力行政はブルドーザーといわれている。いろいろな意見が出てきたときに、いろいろな選択肢があって、それぞれの長所・短所やフィージビリティを勘案しながら、政策として一つの筋を取るにいたった選択の筋道を示さなければならない。なぜ、こういう政策を採って、それがどういうところにいこうとしているのかということ、フィージビリティとともに、つまり、今の技術ではここまでというのは示さなくてはいいけない。今度の全体像では、それぞれのコンポーネントを選択するに至ったいろいろなファクターを示し、だからこのようなことになっていると示す

ということだと思う。多数のご意見を聞いたから良いという話ではなく、聞いたことに対して一つ一つ答えを出しながら選択していくというプロセスを見せることが必要である。

(藤家委員長) 原子力委員会は、原子力政策に責任を持っており、いろいろのご意見があった中で、全体像をまとめている。それに対する責任は当然ある。ただし、原子力長期計画は、5年間そのままで行くことはほとんどない。現実的な対応の中で、現実方策を刻々と変えてきたという事実があり、どう考えてもこれしかないということにはならないと思う。ただし、今、こう考えているということを示すことは原子力委員会の責任だと思う。

核燃料サイクルのあり方について、核燃料サイクルと原子力発電を切り離して考えるべきという意見がある。これをどう受け止めるか。切り離す性格のものなのかどうか。

(木元委員) 例えば、軽水炉だけ利用するMOXを含むサイクルと、「もんじゅ」まで実施するサイクルとの二つの路線をどのように評価したら良いのかというものの見方や、現状の判断については、原子力委員会のコメントとして記載できるかもしれない。しかしながら、「もんじゅ」までどうしてもやらなければならないという表現はできるかどうか。

(藤家委員長) 例えば、軽水炉だけ実施することは可能か。そこがまず出発点の問題であると思う。再処理をしないとすると、軽水炉は使用済燃料をどうするかが大きな問題である。

(森島委員) ステップが二つある。一つは、軽水炉のところでストップでなく、再処理をしてMOXという形で、サイクルができるのかという問題がある。もう一つは、高速増殖炉まで実施するかという問題がある。議論として、二段階に分けてそれぞれきちんと議論していかないと、「もんじゅ」は良くないということから、再処理もおかしい、さらには、使用済燃料をどうするのかという話になる。きちんと段階を分けて議論すべきだと思う。

(木元委員) 入口は違っても方向は同じようになるのではないかという感触を持っている。原子力長期計画を策定した際や、政治家の方の話を聞いてみても、FBR(高速増殖炉)を実現可能として行うことは認められないが、研究開発の対象としては認めると言っている。このようなことを踏まえて、ある程度の論じ方ができるような気がする。

(藤家委員長) 昭和 3 0 年ごろは、実用化している軽水炉と、近い将来実用化される M O X のようなものと、それから研究開発で捉えている高速炉があり、この間のステップがきちんとつなぐと考えていたが、そう簡単につながらない状況にある。資源論だけで議論する時代は過ぎ、環境保全について考慮しなければならない。環境保全というのは地球温暖化だけで見るわけではなく、放射線のリスクも同時に考慮しなければならない。その議論を原子力委員会はきちんと捉えておかなければならない。

ここからは、「 2 . 原子力発電の意義」について議論したい。

(森嶋委員) これから原子力発電についてどういう政策をとるかについては、必ずしも意見が一致していない。これからどうするかという問題は、結局、これからどういうエネルギー源があるかという将来の動向と、将来の原子力に代わるべきエネルギー源をどう評価するかということであり、全体像にそれをきちんと記載しないといけない。

(木元委員) 既に原子力発電が選択されているという認識からスタートした発想でものを言っているところが問題だと思う。私が以前から話していることは、なぜ原子力なのか、という一番原点のところからトレースしなければ、この話は終わらないと思う。なぜ日本は原子力発電を選択したのかということは、既に原子力発電は選択されたものと理解している方からすれば、既に話したことなので、再度、話をする必要がないと考え、話から抜けてしまい、その結果、逆に不信感を増長させている部分があると思う。なぜ日本は原子力発電を選択したのか、コンパクトに、しかも誠実に堂々と示すことが必要と思う。

(藤家委員長) この話は、まさに木元委員がこれまで言ってきたことをまとめていただくということだと思う。原点に戻るということがどういうことか。私なりに考えると、こういう話は世代が変わると、また、原点から話をしなければならないと思う。

(木元委員) 世の中は変わってきており、自然エネルギーに対する評価が高くなっている。その中で、原子力を進めることはどういうことなのか、今までとは違った感触で、トレースしていかなければならないと思う。

(藤家委員長) トレースする上で、原子力や核燃料サイクルに関して世界がどう動いているか認識することも重要である。

ここからは、「３．プルサーマル、六ヶ所再処理施設」について議論したい。

（竹内委員）原子力発電は技術開発に３０年かかった。３０年かかって高い稼働率を実現してきた。技術開発は３０年くらいかかるというのが現実であり、将来の選択肢として、六ヶ所再処理施設は絶対に仕上げなければならない。確固たる信念を持って進めていかなければならないと思う。

（藤家委員長）この話は建前論ではないという話をどこまで記載できるか。硬直してしまうと、資料１－１に記載されているようなご意見が出てくるのは、ある意味で当然だと思う。

プルトリウムを燃やすことについて議論したい。本当はウラン２３８を燃料として使うということだけである。ウラン２３５とウラン２３８を比較するとほとんど違いはない。ウラン２３８を燃やすということをどう考えていくのか。今の軽水炉でも、８％くらいのウラン２３８の核分裂が寄与しているという事実を原子力委員会は国民の皆さんに伝えなければならない。また、プルサーマルと六ヶ所再処理施設をセットで扱う方が良いのか。六ヶ所再処理施設が果たして全ての日本の再処理のスタンダードになるかという問題も残っている。

（森嶋委員）我が国においてプルサーマルなり、再処理施設というのは、高速増殖炉の問題もあるが、むしろ、バックエンド、高レベル放射性廃棄物をどうするのかという問題がある。イコールの問題ではないのは確かだが、同時にこの問題は、放射性廃棄物の問題と関わっており、どう記載するかももう少し検討しなければならないと思う。

（藤家委員長）確かに、プルサーマルと六ヶ所再処理施設の話は高レベル放射性廃棄物の処分問題と接点がある。この頃、外国での議論を聞くと、例えば、米国ではユッカマウンテンが処分場として決まったが、決まってすぐに、「決まったのなら処分場に使うのはもったいない。場所が折角あるのだからもっと効率的に使った方がよい。再処理して、量を減らして捨てた方がよい」という議論に展開している。日本はそこまで議論がいかない。

（木元委員）プルサーマルと六ヶ所再処理施設の話は分けた方がよいと思う。プルサーマルは、資料１－１の「２．原子力発電の意義」で記載した方が分かり易いと思う。欧米では、プルサーマルについて、軽水炉において、将来ＭＯＸを装荷することを最初の段階できちんと説明している。日本の

場合は、稼働を始めてからプルサーマルという独自の言い方をして導入しようとしたため、とても危険なものが入っているのではないかという印象を与えてしまっている。それを払拭するためにも「原子力発電の意義」の中にプルサーマルを記載した方が良いと思う。軽水炉サイクルで使うMOX燃料は、実はこういうものであるということをQ & Aで記載し、MOXを使う意味はということだと明確にし、六ヶ所村の再処理施設の意義はということだと説明した方が良いと思う。そこを分けないといけなと思う。

(藤家委員長) 仏国と英国にあるプルトニウムについては、持って帰って燃やさなければいけないという理解はある。これは国際約束であり、それを前提に頼んだものである。しかし、それと六ヶ所施設の話は違うという意見があった。核燃料サイクルの必要性を感じるならば、日本が全く技術を持たなくて済むのかという議論も必要になってくる。

(竹内委員) 六ヶ所施設はプルサーマルの成立することが前提ではない。直接処分するか、再処理するかという選択で決まってきたと思う。それが第一だと思う。

(藤家委員長) 次に「4 . 高速増殖炉サイクル、もんじゅ」について議論したい。「高速増殖炉」ではなく、「高速炉」という呼び方にした方が良いと考えている。資源論を最優先に考えていたときは「増殖」という機能が最も重要だったが、今は環境についても考慮しなければならない。超ウラン元素を燃やすという高速中性子の役割を重視すると、「高速炉」という呼び方の方が適切であり、次回の原子力長期計画から使ってはどうかと考えている。

(木元委員) そのような場合は、なぜ「増殖」という言葉を除いたのか、という説明をきちんとしなければならない。

(藤家委員長) そのとおりである。現行の原子力長期計画では「高速増殖炉」としているので、「高速炉」という呼び方をいつから使うのかについては検討したいと思う。

(遠藤委員長代理) 現時点では、「高速増殖炉」を使う方が良いと思う。核燃料サイクルをどう考えるのかという点にも関係してくるので、少し検討が必要である。

(藤家委員長) 高速増殖炉サイクルと「もんじゅ」について考えたい。原子力委員会では、「もんじゅ」を、我が国における高速増殖炉サイクル技術の研究開発の場の中核として位置付けている。

(森嶋委員) 高速増殖炉そのものではなく、高速増殖炉サイクルの確立に至る可能性を開くための研究開発という位置付けだと思う。それをどのように説明するのが重要である。

(竹内委員) 高速増殖炉は、軽水炉では燃やしきれないウランを徹底的に燃やすことができるという大きなメリットがあり、資源の観点から言うと、我が国の将来がかかっているとも言える。また、世界各国からも「もんじゅ」の運転再開を要望する声があがっている。世界的な公共財としての期待がある。

(遠藤委員長代理) 「もんじゅ」と「常陽」と「実用化戦略調査研究」を、高速増殖炉の実用化に向けた研究開発の場としてきちんと位置付けることが重要である。

(藤家委員長) 「もんじゅ」についていろいろなご意見があるが、平成 7 年に二次系ナトリウム漏れ事故をおこして、いまだ運転が再開できていない。世界を見ると、これと同様な事故が 150 回ちかく起きており、例えば、カザフスタンの高速炉 BN - 350 では 20 年間で何度も起きている。また、英国の PFR でも事故が起きている。しかし、いずれも 1 年ぐらいで運転を再開している。なぜ我が国では運転を再開できないのか、という点について原子力委員会は考えなければならない。「もんじゅ」は不要ではないかというご意見もあるので、この点についてはきちんと見解を示さなければならない。

続いて「5 . 放射性廃棄物、バックエンド対策」について議論したい。

(森嶋委員) 原子力では、軽水炉の安全性確保を優先して考えていたため、また、放射性廃棄物が出てくるのは少し先のことと思い、本件については少し後になってから本格的に動き始めたところがあった。原子力はトイレのないマンションと言われていたが、まだ一般の皆さんには放射性廃棄物の認識が低いと思う。放射性廃棄物やバックエンド対策について、どのような位置付けで考え、どのような議論を経て今に至っているのかについてきちんと示す必要があると思う。我が国は、まだ完全に確立している訳ではないが、外国と比べても遜色のない状況であり、今後何が必要かという

点も含めて示していくことが重要である。

(木元委員) この課題は昔から取り組んでいるものだが、あまり理解されていないのではないかなと思う。しかし、これは自分たちが出したゴミだという認識を持とうという点については理解いただけてきたと思う。電力会社が出したというのではなく、自分たちが電気を使ってしまった結果生じたゴミであり、それをどうするのか、という点から話が進んできており、NUMO(原子力発電環境整備機構)も設立された。このような説明はできると思う。一方、バックエンドのコストをどのように考えるのかについては、いろいろと考え方に違いがあるので、それについて私たちがどのように表現するのが重要と思う。

(藤家委員長) そのとおりだと思う。「高レベル放射性廃棄物処分懇談会」がスタートしたのは平成8年であり、かなり時間がたっているため、このような議論があったことが忘れられつつある。議論の継続性が重要で、考えなければならないことである。

次に「6.核燃料サイクルの経済性」について議論したい。エネルギーコストは何で決まるのか、というところまで考えると、経済性の評価は非常に難しい。まず実用化しようとするものが、常に「コマーシャル・アウェアネス」を持つことが重要である。

(竹内委員) 将来の為替相場等も考慮しなければならないので、とても困難である。燃料の値段がどうなるのかという点が大きなファクターとなる。

(遠藤委員長代理) ウランの値段によって大きく影響すると思う。ウランの値段が上がれば、相対的に核燃料サイクルの費用が低くなる。この評価は非常に難しいと思う。

(藤家委員長) 一方で、直接処分の難しさや、使用済燃料を直接処分できるのかどうか、ガラス固化しなければならないのではないかな、といった点を議論しなければならない。バックエンドにおいて、どれが最も良いのかを考えることが重要である。

(森嶋委員) 経済の専門家による経済性の評価は、単純な前提である場合が多く、そういったものに基づいて、原子力の経済性について疑問視するような意見が出ている。不確定要素がたくさんあるので正確に算出するのは不可能だが、それでもコストについて議論する際は、どのような不確定要素があって、どのような前提で議論している、ということをし

ちゃんと示しておかなければならない。仮に、その経済性の評価結果が良くないということでも、エネルギーセキュリティなどの観点からも見る必要がある。また、放射線によるリスクといった数値化が難しいファクターもあるが、これまでの評価では、このようなファクターを無視したシンプルな評価が多い。しかし、政策を決定するための評価では、このようなシンプルな評価が必ずしも有効であるとは限らない。これらの問題について、我々はきちんと対応しなければならない。

(木元委員)「いろいろな供給源があるなかで、エネルギーの自給率にどの程度寄与するのか」というご意見があるが、これについてはこれまであまり触れられていなかった。「どの程度のエネルギー需要があって、何がどの程度寄与できるのか」について素直に書いた方が良いのではないかと思う。また、風力は少しぐらい費用が高くても推進する、といったように経済性だけの問題ではない価値観が働くところがある。

(藤家委員長)次に「7.信頼回復などのために求められること」について議論したい。

(木元委員)一方では「情報公開されていないのではないか」と言い、他方では「情報公開している」と言っていることがよくある。このギャップはなぜ生じるのか、という点を考えなければならない。以前、市民参加懇談会において、届いていないというご意見があったので、「知りたい情報は届いていますか」というテーマを取り上げた。これは、どうしてそうなのかということについて、きちんと示していかなければならない。「国は、方針は示すものの、住民対策、広報啓蒙活動は、事業者、立地自治体任せではないか」というご意見があるが、いろいろな不信感がここに表れている。原子力委員会としては、できるだけ接点を多く作って、可能な限り知りたい情報を公開して、届いたと確認されるようにしなければならないと思う。

(藤家委員長)昨年、福島県知事と意見交換を行った際に、「原子力委員会は原子力政策を進めて行く上で、国民の厳しい視線と期待を背負い、地方自治体をはじめとする地域の方々と関係行政機関及び事業者とは、それぞれ重要な関係にあると考えている」と申し上げた。信頼回復などに関しては、これまでの延長線上でやっていった方が良いのか、それとも新たな切り口で展開した方が良いのか。原子力委員会は、「いつでも、どこでも、だれとでも」というキャッチフレーズでやってきているが、まだこのようなご

指摘があるのも事実である。

(木元委員) 先日、テレビで東京地方の停電について実態を話したときに、「もちろん停電にならない方が良いが、このような事態を招いたのは東京電力ではないか」という話になった。いくら実態についてご説明したとしても、起こしてしまったことで信頼を失ったことについて説明したりすることは非常に難しい。これに対しては真摯に謝るしかないと思うが、その点についてどのように書くことができるのかを考え、きちんと述べたいと思う。

(藤家委員長) 「８．電力自由化」についてはどうか。

(森嶋委員) コストの問題が大きく関係してくると思う。

(藤家委員長) 続いて「９．その他」についてはどうか。

(遠藤委員長代理) この議論の中では、核不拡散に関することが欠落している。核燃料サイクルを考える際は、核不拡散という観点からも考える必要がある。この点については、日本ではあまり関心がないところがあるので、議論から抜けがちである。内外で認識に大きなギャップがあるので、これについてきちんと示す必要がある。

(藤家委員長) これは非常に重要なことであり、原子力委員会では、プルトニウム利用の基本的な考え方について議論しているところである。きちんと考えを示す必要があると思う。

(木元委員) 「国民の安心、国際的な信頼の観点から、プルトニウム利用の基本的な考え方を示してほしい」というご意見もあった。この頃、日本でも核兵器を持つべき、といった意見も出ていることは無視できない。

(森嶋委員) 我が国で核不拡散についてあまり議論がないのは、関心の有無の問題ではなく、原子力の平和利用や核不拡散は当然のことと考えているからだと思う。

(藤家委員長) 世代が変わったからだと思う。原子力の平和利用については、当たり前のことであり、きちんと取り上げれば、すぐに理解いただけると思う。

ここで議論した内容をもとにして、核燃料サイクルの全体像をできるだけ早くまとめたいと思う。

(2) 遠藤委員長代理の海外出張について

標記の件について、榊原参事官より資料 2 に基づき説明があり、以下のとおり発言があった。

(藤家委員長) 「Atoms for Peace after 50 years 会合」も仏国の要人との会談もとても重要なものである。「Atoms for Peace after 50 years 会合」では、我が国の考え方や意見は非常に重要なものだと思う。仏国の要人との会談では、核燃料サイクルや高速増殖炉の件で議論になると思うので、よろしく願いしたい。

(3) その他

- ・事務局作成の資料 3 の第 2 1 回原子力委員会定例会議議事録(案)が了承された。
- ・事務局より、7 月 2 2 日(火)に次回定例会議が開催される旨、発言があった。